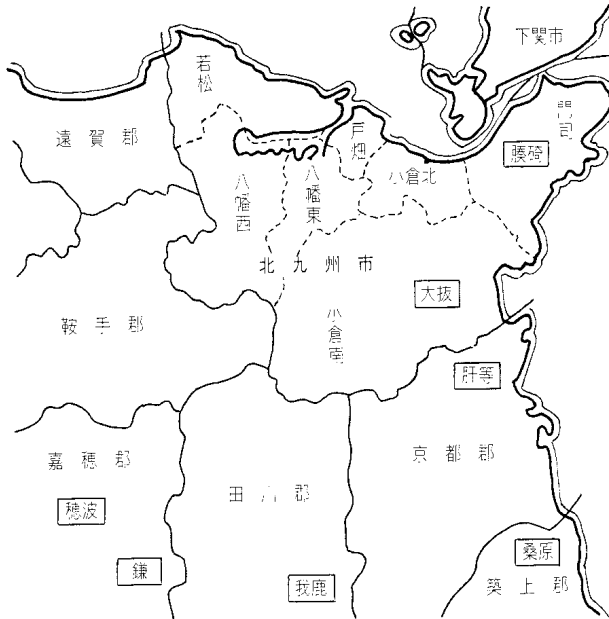


第43図 北部九州の屯倉分布図



(『北九州市史』総論・先史原史 北九州市 1985より)

が、筑紫君の反乱の際には豊国の豪族も、盟主であったとされる磐井に加担したとされており、これら豪族の勢力に対する抑圧と交通路の分断、さらには折から朝鮮半島情勢の緊迫化に対処するための軍事的基地の確保をも考慮してのことであろう。肝等屯倉の置かれた地域は、長峽

- 火国
- 肝等屯倉 (福岡県京都郡刈田町 旧京都郡)
- 我鹿屯倉 (福岡県田川郡赤村 旧田河郡)
- 桑原屯倉 (福岡県築上郡築城町 旧築城郡)
- 春日部屯倉 (熊本県熊本市国府付近 旧託麻郡)

川河口の天然の良港であった草野津も含み、律令時代にはこの近くには京都鎮が置かれたとも推定されていて、周防灘に面した要地であった。このころの京都地方の前方後円墳には番塚古墳(刈田町)があるが、その規模は御所山古墳の半分以下であり、またこの古墳を最後に周防灘沿岸部の前方後円墳は姿を消していく。このあと主要古墳群は南部の内陸部(京都郡勝山町付近)に中心部を移していくが、このころ内陸部の農地開発が飛躍的に進んだことに加えて、この肝等屯倉が東部に設置されたことと何か関連があるのだろうか。(第43図参照)

### 三 京都・行橋地方の古墳時代

古墳時代になっても、しばらくは墓制などの面で弥生時代の伝統が根強く残っていくものの、大和政権による全国的な統一事業が進展していくなかで、九州も畿内の政治的・文化的な影響を強く受けるようになってくる。特に瀬戸内の西端に位置して、東の周防灘に向けて窓口を開く豊前地方は、いち早くその洗礼を受けている。

大和政権と連合関係を持つようになったこの地方の有力な豪族は、畿内の王墓と同じ主体部に狭長な竪穴式石室を持つ前方後円墳を採用して築造を始めている。

五世紀になって、北部九州に大陸から古墳に横穴式石室を構築する新しい墓制が伝わると、この地方でもその影響を受けて、前方後円墳や円墳などの主体部も竪穴式石室から竪穴系横口式石室へと変化を見せて過渡期的な様相を見せる。やがて家族的な横穴式石室へと移行し、さらに六世紀の中ごろには屍体を埋納する玄室の前部に前室(副室)をも付

設するという複室構造を持った古墳も出現してくる。

そして六世紀後半から七世紀にかけては、各地域の有力家長層までが古墳を築造し始め、京都・行橋地方の平野部周辺の山麓部には、このころの群集墳が至るところに見られる。また、古墳の中には墳丘を持たずに山地の緩斜面に直接墓室を掘っただけの横穴古墳（横穴）も各地域にまとまった分布を見せている。

次にこれを時期的に眺めると、まず発生期の古墳としては竹並遺跡の円墳・方墳群（行橋市）、石並古墳群（行橋市）、北野古墳群の中に認められ、それぞれ円墳や方墳の同一封土（盛り土）の中に一基から多いもので七基もの箱式石棺・石蓋土壙・土壙・粘土槨などを埋置している。内部主体や副葬品も伝統的なものであり、前代に比べて格段の卓越性も認められない。

やがて畿内型古墳である前方後円墳がこの地域にも出現するが、石塚山古墳（荻田町）が四世紀前半代で最古のものである。狭長な竪穴式石室を持つこのような前方後円墳は、大和政権の国内統一事業が進んでいく過程で、九州ではまず北東部の海岸部に波及したものとされている。

畿内の古墳文化の影響を受けるようになってからも、引き続き在地的性の強い小円墳が営まれるが、一方ビワノクマ古墳（行橋市）・石並十九号墳（行橋市）などのように円墳の主体部に畿内型の竪穴式石室を導入した古墳も現れるようになる。

五世紀後半になって北部九州に大陸から横穴式石室構築の手法が伝わるに及んで古墳の主体部も変化を見せ、石並八号墳・二十一号墳（行橋市）、中原古墳群（勝山町）、松山四号墳・五号墳・六号墳（荻田町）のように竪穴系横穴式石室古墳が出現し、やがて六世紀には横穴式石室をも

つ古墳が営まれるようになる。

一方、前方後円墳も引き続き周防灘沿岸部に築造されるが、五世紀後半とされる御所山古墳（荻田町 国指定史跡）は旧豊前国でも最大級の規模であり、竪穴式手法を残した横穴式石室は石障によって屍床が設けられていて筑・肥文化との関連が濃厚であり、筑紫国造磐井との関係が論じられている。同時期のものとしては、石並二十号墳（行橋市・帆立貝式古墳）がある。六世紀初頭とされる番塚古墳（荻田町）も主体部が竪穴系横穴式石室の前方後円墳である。

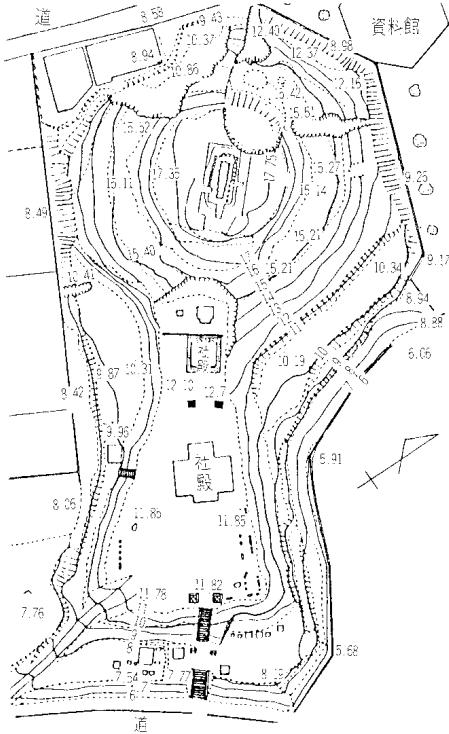
五世紀末から六世紀にかけて、前方後円墳の築造はその中心が南西の内陸部へ移動するようすが見られる。そして庄屋塚古墳・箕田丸山古墳（勝山町）の時期（六世紀中葉）になって複室構造をもつ横穴式石室が見られるようになる。六世紀後半には、その規模を縮小しながら今川や祓川などの流域平野の最奥部にまでも分布を見せるようになる。

六世紀後半になって、農業共同体内部の階層分化に伴い、各地域に多くの小首長が誕生するようになると、これら小首長の墳墓が営まれ、各地域に群集した小円墳が見られる。それらの古墳は墳裾を接する形でまとまって所在するが、特に法止寺地区（荻田町）・福丸地区（行橋市）・黒田地区（勝山町）などには、この時期の群集墳が濃密に分布する。

古墳時代の終末期になって勝山町黒田地区や豊津町八景山山麓部一帯などには巨石で構築された古墳群が見られるが、綾塚古墳・橋塚古墳（勝山町 国指定史跡）は特に大型の円墳として際立っており、豊の国造家の墳墓に比定されている。

また、これら地表に封土をもつ古墳とは別の横穴墓も五世紀から七世紀にわたり各地域に分布を見せるが、前・中・後期とそれぞれの時期の

第44図 石塚山古墳実測図



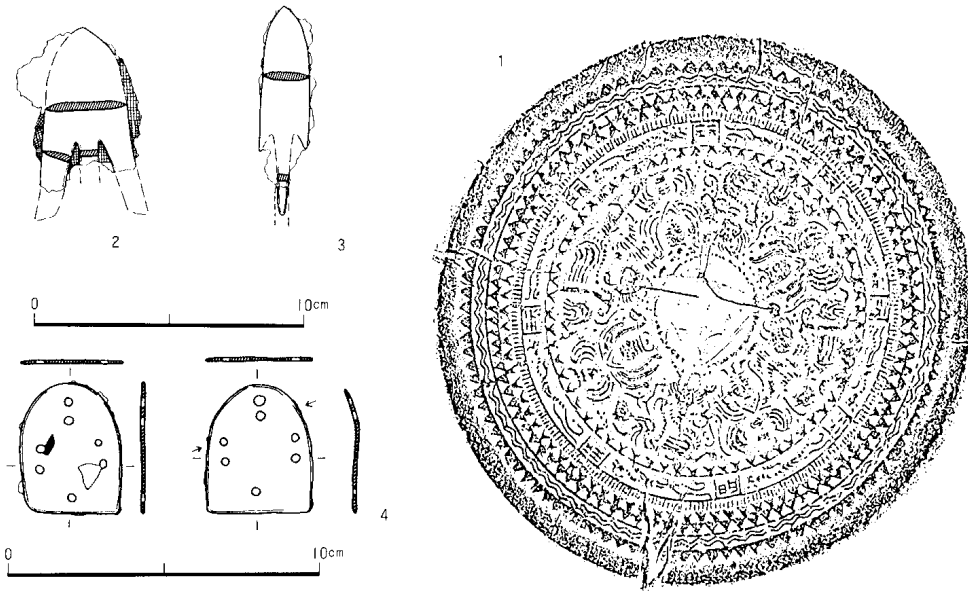
古式の前方後円墳で、緩やかに海に向かって下がる低丘陵先端部に位置する。墳丘の全長約一〇〇m、後円部の高さ約一〇mで二段に築造

(一) 石塚山古墳 (京都府刈田町富久町 国指定史跡)

四 京都・行橋地方の主な古墳

特色を示しながら展開している。特に竹並横穴群・前田山横穴群(行橋市)は大型宅地開発に伴う緊急発掘調査が行われ、現在は消滅したが、貴重な資料を提供している。  
地下式横穴墓は、この地方では分布が極めて粗であり、刈田小学校校庭遺跡(刈田町)・尾花原遺跡(豊津町)など七か所を数えるに過ぎない。(第22表・第89図参照)

第45図 石塚山古墳出土品(一部)



1 三角縁獣帯文四神四獣鏡 2、3 鉄鎌 4 冑小札  
(第44、45図は刈田町教育委員会「石塚山古墳発掘調査概報」刈田町文化財調査報告書第9集 1988より)